

CARE World

Vol. **4**

ケア・インターナショナル ジャパン
Newsletter
October 2006

ケア・インターナショナル
ジャパンは、世界70カ国
以上で貧困の根源の解決
に取り組む国際協力NGO。
CAREのメンバーです。
CAREの活動は、世界中の
33万人のサポーターに支
えられています。



Contents



page 3 事務局からの報告

page 5 ケア・インターナショナル ジャパン 2006年度事業計画

page 8 フィールド最前線
「ジャワ地震被災地から」
プログラムコーディネーター 鈴木 幸子



page 10 スリランカ「プランテーション居住者の生活改善事業を終えて」
ケア・スリランカ ヌワラエリヤ事務所駐在
プロジェクト・マネージャー 栗原 俊輔



page 11 アフガニスタン「コミュニティ運営による初等教育プロジェクト」
2年度終了報告
プログラムコーディネーター 草川 町子

page 12 「パキスタン地震緊急支援事業」終了報告
プログラムコーディネーター 草川 町子

page 13 世界のCARE
CARE in Niger ～ニジェールからのストーリー

page 14 私スタイルのCAREライフ
メールマガジン作成ボランティア 津田 幸子

page 15 Our Supporters ～CAREサポーターからの声

page 16 CARE Notice Board

表紙写真：ニジェール、マラディ地方にて。HIV/AIDSに対する知識と理解を促進するための活動に参加するCAREのマラディ・ユース・プロジェクトメンバーの若者たち
©2004 CARE/Maggie Steber

事務局からの報告

ケア・インターナショナル ジャパン 支援組織報告

6月27日(火)に、ケア フレンズ札幌の恒例の講演会・バザーが行われました。エジプト考古学者の吉村作治さんがユーモアを交え、また情熱的に、遺跡発掘の体験談をお話してくださいました。

7月2日(日)には、4月に発足したケア・サポーターズクラブ熊本の本発足記念イベントが開催されました。会の立ち上げに尽力して下さったスリアワン洋子さんの講演会「私の人生：熊本からインドネシアに嫁いで26年」およびインドネシア製品のバザー。そして記念パーティーには、新会員の皆様、地元の政界・財界、CAREの支援組織の方々が大勢詰めかけ、今後の発展に乾杯しました。

この講演会を通して、ケア フレンズ札幌およびケア・サポーターズクラブ熊本から温かいご寄付をいただきました。紙面をお借りしてお礼申し上げます。

CSRシンポジウム開催 「戦略的社会貢献とは何か？」

9月25日(月)、大手町サンケイプラザにおいて、CARE60周年記念 CSRシンポジウム「企業と社会の新しいパートナーシップに向けて—社会的ブランド価値を高めるための協働戦略とは」を開催しました。定員を上回る300名近い人々で会場は熱気に溢れ、企業経営者、経営企画担当者、CSR・社会貢献担当者、広報担当者、マーケティング担当者などを中心に、行政や国際機関、NGO、メディアに至るまで、本場に多岐にわたる業種・職種の皆さまにご参加いただき、関心の高さが伺えました。

コンプライアンスや環境対策など、これまでのリスク要因の軽減・防止を第1の目的とするCSRではなく、社会価値の創造や市場における差別化を目的としたより戦略的なCSR・企業の社会貢献活動に焦点を当て、一歩踏み込んだ形での提案や議論を展開。60周年を迎える節目に企画したこのシンポジウムを契機に、CAREは、企業のベストパートナーとして、新たな挑戦を始めます。

当日発表資料については、以下のウェブページよりダウンロードいただけます。

http://www.careintjp.org/csr0925_report.html

■お知らせ：当財団ホームページに、新たに「企業パートナーシップ」のページを創設しました。ぜひご覧ください。

<http://www.careintjp.org/partnership/index.html>



グローバルフェスタ JAPAN2006に 参加しました

9月30日(土)、10月1日(日)に日比谷公園で開催された、毎年恒例のNGOや国際機関が集まる一大イベント、グローバルフェスタ(旧 国際協力フェスティバル)に今年も参加しました。例年通り、ブースにて活動紹介やCAREグッズの販売を行ったほか、初めての試みとして、ワークショップにて「緊急支援の潮流—ジャワ島地震緊急支援の現場から」と題して、報告を行いました。現地の被害状況や現場で何が求められているか、また、それに応えるためのCAREの支援活動についての報告に、多くの参加者から強い関心が寄せられました。両日とも、多くのCAREボランティアさんに支えられ、ブースを去年にも増して盛り上げることができました。ご協力いただきました皆さん、本当にありがとうございました。



ケア・インターナショナル ジャパン 2006年度事業計画

レインボー事業終了について

全国の小中学校・団体の皆様からご協力をいただき、2000年度から6年間実施してきたカンボジアにおける「レインボー事業」が6月末日をもって終了いたしました。

この事業では、物資の不足しているカンダール州ルックダイク地区の27校に対して、日本で集めた文房具や画材を送り、現地で子どもと教師に対する絵のワークショップを開催することで、美術の授業のできる環境づくりを支援してきました。また、両国の子どもたちの絵の交換を通して、国際理解を促進してきました。事業終了にあたって6月に現地で実施した終了評価では、画材の補充と教師の技術向上が、現地で定期的

な美術授業の実施につながったことが確認されました。また、ワークショップで学んだ描画が、社会問題啓発ポスターコンテストの開催や教師の教材作りに役立てられていることもわかりました。現地の学校と人々が、今後も工夫を凝らし、活動を発展させていくことを期待したいと思います。

これまで、文具や画材提供およびレインボー基金を通して、ご支援・ご協力いただきました皆様に心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。



お知らせ

クレジットカードでもご寄付いただけるようになりました。

これまでの郵便振替に加えて、2006年10月からはクレジットカードでもご寄付いただけるようになりました。ご利用可能なクレジットカードは、VISA、MASTER、アメリカンエクスプレス、JCB、DCの5種類です。

クレジットカードによるご寄付をご希望の方は、当財団のホームページから直接お手続きいただくか、『クレジットカードによる寄付申込用紙』に必要事項をご記入のうえ、事務局までファクスまたは郵便でお送りください。申込用紙はホームページから直接印刷できますが、ご連絡いただければ、こちらからお送りいたします。

詳しくは、ホームページをご覧ください。直接、募金担当の荒井 (E-mail: bokin@careintjp.org 電話: 03-5950-1335) までお問い合わせください。

「CARE マンスリー・ギビング・プログラム」のご案内

このたびCARE60周年を記念して「CARE マンスリー・ギビング・プログラム」を創設。プログラムの開始に伴い、千円単位で自由にお決めいただいた定額寄付金を毎月1回、ご指定の金融機関や郵便局の口座から自動的に引き落とすことで、継続的にCAREの活動を支援いただけるようになりました(手数料免除)。ぜひ、多くの皆さまのご参加をお願いいたします。

たとえば毎月3千円のご寄付は、世界中にたくさんの笑顔を生みながら、1年間でこんな風に実を結びます。

【インドネシア】緊急支援

自然災害発生直後から1年間にわたり、被災者429人分の水浄化剤を届けることができます。

【カンボジア】女子教育

貧しい家庭の女子34人が1年間学校に通うことができます。

【ベトナム】HIV/AIDS対策

移動・出稼ぎ労働者やコミュニティの人々52人に対し、HIV/AIDS予防のトレーニングを実施できます。

プログラムの詳細や参加のお申し込みについては、ニューレター同封のお手紙もしくは専用リーフレットをご参照いただくか、直接事務局までお問い合わせください。

Our Supporters での会員および寄付金協力者のお名前掲載について

長年にわたり、当財団のニューレターにおいて、会員および寄付金協力者のお名前を掲載させていただいてきましたが、事務局には、名前の掲載を控えてほしいといったご要望が個別に寄せられることがありました。そこで、前号のニューレター送付時に同封させていただいたアンケートにおいて、掲載の要・不要について皆様からご意見をいただいた結果、今月号以降のニューレターでは、会員および寄付金協力者のお名前の掲載はしない方向にさせていただくことになりました。ぜひ掲載してほしい、といった考えをお持ちの方も多くいらっしゃると思いますが、どうかご理解・ご了承いただけましたら幸いです。なお、掲載を取り止めたことによって、会員の方やご寄付をいただいた方に対する事務局からの謝意は変わるものではありません。今後とも、引き続き、CAREの活動を温かく支えていただきたくお願い申し上げます。

なお今後は、アンケートなどに記載していただいた皆様からのメッセージを随時、Our Supportersに掲載させていただきたく思います(掲載についてご承認いただいた場合のみです)。本誌では15ページ目に掲載していますので、ぜひご覧ください。また、皆様からのご意見・ご感想などをお寄せいただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

ビジョン

ケア・インターナショナル ジャパンは、誰もが互いを尊重し、人間らしく生きる平和な世界を目指しています。

ミッション

ケア・インターナショナル ジャパンは、コミュニティの人々と共に貧困を生み出す根源の解決に取り組みます。

基本方針

ケア・インターナショナル ジャパンは、アジアにおいて最も不利な立場にいる人々が自立発展するための支援を行います。

近年、今まで比較的安定している、または安全であると思われたアジアの途上国において、政権の崩壊や民族間の対立により治安・秩序が悪化してきています。これらの問題は、恒常的な貧困や人的・自然災害と密接に関連していますが、国際協力に携わる機関や団体の支援活動が制限され、支援が最も必要とされているところにいき届かないという状況を生んでいます。

このような中、国際協力NGOとして活動を効果的に継続していき、貧困や紛争の根源的な解決に貢献するためには、高度の専門性、安全対策などを含む組織の運営体制、他機関・団体との協力、そして何よりも長年にわたって築かれた現地政府や関連機関、NGOなどとの信頼関係が鍵となります。

支援活動の概要

本年度は、現在、事業を実施している国(アフガニスタン、カンボジア、スリランカ、ベトナム)での継続事業のほか、インドネシア、東ティモールおよびアジアの複数国にて新規事業の立ち上げを目指します。その際、ジャパン・プラットフォームなどに積極的に参加し、緊急・復興支援活動の拡大を目指すとともに、平和構築などの分野の事業についても検討します。また、アドボカシー、市民や学生などを対象にした国際理解教育、国際協力関係者のための研修事業に加え、調査事業なども実施していきます。

活動計画

1. 開発支援事業

①女子教育事業 サマキクマールII

対象地域: カンボジア

(ブレイベン州ピムチャオ地区)

対象者: 退学の可能性が高い小学校高学年女子と就学していない6歳~18歳の女子約1400名およびコミュニティ住民

実施期間: 2004年2月~2006年12月(2年10カ月間)

主支援者: 国際協力機構(JICA)

この事業は、貧困や住民の女子教育への理解不足が原因で女子の就学率、進学率が低い地域において、女子が教育を受ける機会が増えるよう、家庭、コミュニティ、学校の環境を改善していくことを目標としています。

本年度は最終年度として、昨年度に引き続き、コミュニティの人々、学校、地区行政関係者(地区教育局、州教育局など)、女子学生たちが中心となって活動を行います。学校とコミュニティにおいて、高学年の女子・教員・母親会・関係者に対して教育の重要性についての意識向上活動を実施するほか、貧困家庭の女子を支援するための奨学制度、コミュニティにおける基礎識字およびポスト識字教育などを継続します。また、コミュニティの人々、学校、地区行政関係者が連携を深めるための活動も引き続き行います。

②コミュニティのための人材育成事業(女子教育奨学制度事業II)

対象地域: カンボジア

(カンダール州ルックダイク地区)

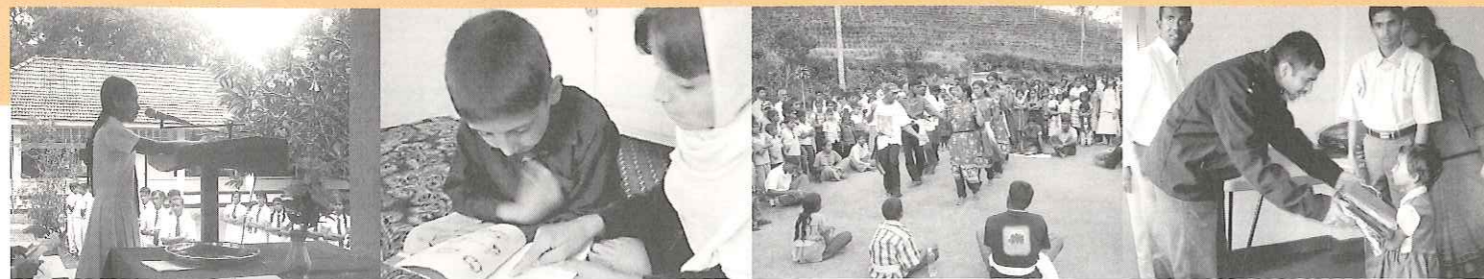
対象者: 女子教育奨学制度事業において中学課程を修了し、高校に進学した奨学生

実施期間: 2004年10月~2007年9月(3年間)

主支援者: ケアフレンズ岡山、ケアフレンズ東京

この事業は、前事業の女子教育奨学制度事業で高校に進学した奨学生が、コミュニティの発展に役立つ知識・技能を身につけることを目標としています。2004年9月に終了した前事業をさらに発展させ、奨学生たちの高校課程の修了を支援すると同時に、彼女たちがコミュニティに必要な知識・技能を習得し、それをコミュニティの人々と共有できるよう、活動を行っています。

本年度は、昨年度に引き続き、奨学生に対する経費補助や補習授業の提供、奨学生・親・コミュニティの人々に対するジェンダー意識向上ワークショップの実施、地区奨学制度運営委員会の組織化と事業運営などを行います。また、奨学生が習得した知識・技



能を社会に還元できるよう、奨学生たちによる、ほかの生徒やコミュニティの人々を対象とした、ジェンダー意識向上ワークショップなどのコミュニティ活動を実施します。さらに、奨学生に対して、これらのコミュニティ活動に必要な技能訓練を行います。

③スマトラ沖津波復興支援 子どもの心のケアプロジェクト

対象地域：スリランカ（南部州ハンバン
トタ県アンバラントタ、ティッサ
マハラマ、スーリヤウエフ）

対象者：アンバラントタ、ティッサマハラ
マ、スーリヤウエフの津波で直接
的・間接的な被害を受け、子
どもの心理的・精神的な問題が
深刻であると判断された6村の
約600世帯3000人

実施期間：2005年4月～2008年3月（3年間）
主支援者：日産自動車株式会社、一般寄付、学校

2004年のスマトラ沖津波により被災した子どもたちの心の傷が癒され、心身ともに健全な生活を送ることができるようになることを目標としています。

事業開始後1年を経て、現地の状況が大きく変化していることを受け、子どもが暮らすコミュニティにおいて、親や教師をはじめとする周辺の人々が、子どもを支援する体制をつくることの必要性が認識されました（これに伴い、事業名を変更しました）。また、当初半年度予算で700万円の規模で実施する予定でしたが、日産自動車からの寄付額が確定したことで、合計約2500万円の規模で実施することになりました。さらに、上記の内容から中長期的なニーズの確認ができたことで、当初2年間の実施期間を3年に延長します。

本年度は、拡大した対象地域にて、コミュニティの子どもの心理的・精神

的ニーズに着目し、活動を継続します。

④コミュニティ運営による初等教育 プロジェクト

対象地域：アフガニスタン（中央部および
南東部の遠隔農村地域）

対象者：中央部および南東部9州の遠隔
農村地域の教員、コミュニティ
の人々と生徒3038名および
地方教育行政機関

実施期間：2004年7月～2007年5月（3年間）
主支援者：ケア フレンス岡山（山陽放送株
式会社）

この事業は、教員・コミュニティ・地方教育行政機関のキャパシティを高め、コミュニティ運営による学校での活動を通して、遠隔コミュニティの生徒が質の高い初等教育を受けられるようにすることを目標としています。

本年度は、昨年度に引き続き、教師20名に対する実地研修および教材開発研修を実施します。また、村の教育委員会メンバーを対象として、女子が教育を受ける権利やコミュニティ学校の運営などに関する研修を行います。生徒3120名に対する教材の提供も継続します。

当初、2年間で計画されたこの事業は、現地のニーズに合わせて、さらに1年間継続して行います。

⑤カントー橋建設にかかるHIV/AIDS 予防事業

対象地域：ベトナム（カントー県カントー市）
対象者：カントー橋建設に関わる移動建設
労働者と周辺コミュニティの人々

実施期間：2006年2月～2008年1月（2年間）
主支援者：大成建設・鹿島建設・新日本製鐵JV

この事業は、特別円借款事業として

実施されているカントー橋建設にとともに、建設に関わる移動建設労働者と周辺コミュニティの人々の性感染症（STD）およびHIV/AIDS感染のリスクを減少させることを目標としています。

本年度は、昨年度に引き続き、HIV/AIDSおよびSTD感染防止および治療についての啓発活動や情報提供を行います。また、ヘルスワーカーに対するカウンセリング・スキル向上のための研修やHIV/AIDS感染防止・治療・ケアサービスにおいて、企業とコミュニティ間の連携を強化するための研修も実施します。また、教育グループを形成し、教育者の養成も継続して実施します。さらに、これらの活動に加えて、コンドーム配布場所を増やし、正しい使用方法に関する情報提供や性交渉方法のトレーニングを実施します。

⑥紅茶農園内住民組織の運営能力向上 プロジェクト

対象地域：スリランカ（中央州およびウバ
州にある15の紅茶農園）

対象者：紅茶農園における住民組織
約100グループ（4500人）
*間接的には、農園居住者
約40,000人も含む。

実施期間：2006年7月～2008年6月（2年間）
主支援者：国際協力機構（JICA）

2006年5月まで実施した「プランテーション居住者の生活改善事業」に続く新プロジェクトです。農園内で行き届いていない公共サービスを紅茶農園住民が活用できるよう、住民組織の運営能力を向上させること、および農園外部からの社会・行政サービス提供団体（地方行政、銀行、地元のNGOなど）との連携を定期化することにより、社会保障システムを強化することを目標としています。

本年度は、前事業にて設立されたインフォメーション・センターを有効活用するとともに、住民組織である参加型チームを対象としたトレーニングや、居住者の話し合いから計画されたミニプロジェクトを実施します。また、農園内外の社会・行政サービス団体に対して、農園内でのサービス提供のための働きかけを行います。

2. 緊急・復興支援事業

①ジャワ島地震緊急支援 水と衛生プロジェクト

対象地域：インドネシア（中部ジャワ州ク
ラテン県およびジョグジャカル
タ特別州スレマン県）

対象者：2006年5月にインドネシアの
ジャワ島ジョグジャカルタ付近で
発生した地震で被災した約
10,000世帯、50,000人

実施期間：2006年7月～2006年8月（2カ月間）
主支援者：ジャパン・プラットフォーム（JPF）、
一般寄付

この事業は、被災者が安全な飲料水を確保することができ、水因性の病気（伝染病や下痢症）のまん延を防止することを目標としています。

活動内容としては、約20,000本（20,000世帯分）の水浄化液や防水シート3000枚の配布、基礎調査および下痢症や水質についての調査・モニタリングなどを行います。また、現地パートナーNGO、コミュニティのリーダー、ボランティアに対して、パートナーシップ、水浄化液の使用法、衛生的な生活習慣などについての各種トレーニングを行います。

*本年度事業計画書の作成後、7月～8月にわたり、上記の「水と衛生プロジェクト」は実施されました。現在は、以下の「保健衛生改善プロジェクト」を実施中です。

②ジャワ島地震復興支援 保健衛生改善プロジェクト

対象地域：インドネシア（中部ジャワ州ク
ラテン県およびジョグジャカル
タ特別州スレマン県）

対象者：2006年5月にインドネシアの
ジャワ島ジョグジャカルタ付近で
発生した地震で被災した約
32,500世帯、約160,000人

実施期間：2006年8月～2006年11月
（3カ月間）
主支援者：ジャパン・プラットフォーム（JPF）、
一般寄付

この事業では、「ジャワ島地震緊急支援水と衛生プロジェクト」に引き続き、実施する復興支援事業です。被災者が保健衛生に関する知識を得ることによって、健康で衛生的な生活環境を回復し、伝染病や下痢症などのまん延を予防することを目標としています。

活動内容としては、防水シート約2200枚の配布、コミュニティの保健衛生ボランティア100名に対するトレーニング、ラジオ放送による保健衛生啓発キャンペーンなどを行います。また、基礎調査および下痢症や水質についての調査・モニタリングを継続して実施します。

フィールド 最前線

ジャワ地震 被災地から

プログラムコーディネーター
鈴木 幸子

ケア・インターナショナル ジャパンは、ジャワ地震緊急支援活動として、ジャパン・プラットフォームからの事業支援金およびスターボックス コーヒー ジャパン 株式会社をはじめ協賛企業、また、個人の皆様からのご寄付をいただき、2006年7月よりジャワ島ジョグジャカルタにて支援事業を本格的に開始し、現在も活動を継続しています。

※現在、皆様にご支援のご協力をお願いしていますジャワ地震緊急募金の受付は、2006年12月末をもって終了する予定です。

ジョグジャカルタから被災地へ向かう幹線道路を車で走っていると、今年5月に地震があったという事はあまり感じられません。しかし、農村へ向かう脇道に歩入ると、その地震が与えた被害の大きさを目の当たりにすることになります。

今年5月にジャワ島にて発生したマグニチュード6.3の地震。亡くなった人の数は約5800人、負傷者は約38,000人と報告されています。全半壊した住居は50万世帯以上にも上ります。時間が経つにつれて、世界の人々の関心が薄れていく中、被災地では、現在も地震直後とほとんど変わらない状況で日々を送る人々が数多くいます。

震災直後と変わらない生活

インドネシア・アチェ州における2004年12月のスマトラ沖津波・地震後の復興支援の過程で、仮設住宅建設に関するさまざまな問題が生じた反省から、今回のジャワ地震に際しては、政府の方針により仮設住宅は建設されていません。インドネシア政府は、当初、全半壊した世帯に対して15~40万円相当の補償を約束したものの、現時点で



現地にて活動を行うケア・インターナショナル ジャパン、プログラムコーディネーターの鈴木幸子(右)

は補償の目処は立っていません。人々は、壊れた家の一部にNGOなどから配布される防水シートをかぶせるか、テントを張って生活しています。一時的な間に合わせの処置ですが、家を建て直すお金もない、特に貧困層の人々は、恐らく数年間このような住まいで風雨をしのがなければならないでしょう。先の見えない状態が続く中、住民の間で大規模な混乱やいざごなどは今のところ起きていませんが、人々に会えば、ためいきとともに聞かれるのが、「住居がね…」という言葉なのです。

コミュニティが中心となった支援活動

CAREでは、地震直後から現地のパートナーNGOと協働して、4万世帯、20万人の人々に対して、水浄化剤、水の保存容器、防水シート、毛布、敷布団などの配布を行ってきました。一言に配布といっても、その過程には多くの人々の関わりがあります。物資を必要としている人々に確実に配布するため活躍しているのが、ジャワに強力な地盤を持つパートナーNGOのスタッフやボランティアです。CAREの配布ポイントは300箇所にも上りますが、彼らがコミュニティを走り回って各コミュニティの代表者たちと調整します。それぞれの世帯の被災の度合いや経済状況を考慮し、支援を必要としている世帯のリスト、また、配布のスケジュールが作成されます。ジャワの人々は、コミュニティの代表者たちが決定したことには納得する傾向があるので、NGOとして支援活動を行う際にも、現地の意思決定の方法を尊重しながら活動を行っていくことが重要なのです。

長期的な視野に立った 保健分野での支援が必要

水の浄化剤配布時には、デモンストレーションを行い、使用方法や注意点などを住民に説明します。

パッケージには、イラストを多く用いてわかりやすく説明した使用書がつけられます。しかし、配布のみでなく、その後のケアも大切です。浄化剤は6月から配布を行っていますが、使用状況について調査を行った結果、浄化剤によって水が安全なものになっても、水を入れる容器が不衛生であったり、手を洗う習慣が身につけていないなど、浄化剤の配布のみでは不十分であることがわかりました。8月からは、住民に衛生面での知識を定着させるため、保健・衛生推進に焦点をあてた活動を行っています。CAREでは、保健ボランティアに対して衛生知識普及法のトレーニングを実施しました。これらの

保健ボランティアが中心となって破傷風や下痢、 Dengue熱などこの地域によく見られる病気の予防のキャンペーンを開催し、住民に正しい衛生知識を定着させるための情報普及を行っていきます。

ジャワにおけるCAREの活動は、迅速かつ効率的な支援活動を行うために、現地の資源・人材・方法を用いるもので、これは、スマトラ沖津波の経験から得た教訓がもととなっています。過去の経験に基づき、よりよい支援活動の可能



「日本の市民からジョグジャの人々へ…」 「よみがえれジョグジャ!」と書かれた横断幕をつけた運搬トラック

性に挑むこと—これが、CAREの支援に対する基本姿勢なのです。

ジャワ通信

2006年8月1日 支援活動は夜まで続く

今日はアイル・ラフマット(水浄化剤)を含む物資の配布活動に同行した。この日、向かった村は、アスファルト舗装が途絶えてからさらに数キロ奥へ入った遠隔地にある。配布活動と一口に言っても、物資を必要としている人々の手に「無事に」届くまでには多くの調整活動が必要となる。

インドネシアでは、市町村、そしてその下位にあたる集落までしっかりした行政区分があり、支援活動も村長・集落長と、「何時・誰に・何を」配布するか調整した上で行われる。このような調整にはそれ相応の時間がかかるが、緊急段階にあっても省くことのできないプロセスである。集落長の一人が私に語ったことがとても印象に残っている。「支援をいただけることには感謝しているが、支援によって集落の和に亀裂が入ることは避けなければならない」。CAREを含む援助機関の財政・人材的キャンパティは限られており、優先順位(子ども・女性・高齢者など脆弱な人々)をつけて支援活動をしなければならぬ。外部者であるCAREが、村長や集落長の合意なしに被災世帯に直接物資を配布していたら、コミュニティの間に支援をめぐる争いを引き起こしていたかもしれない。ジャワをはじめインドネシアの多くの地域では、多数決ではなく参加者全員が納得するまで話し合いを重ねた上で物事を決定することが多い。コミュニティの行政が機能している状況の中では、コミュニティ住民自身が合意形成を行うことにより、支援物資の振り分けなど、住民が納得する形で進めることにより、争いの種を最小化することになる。ジャワ語の表現に「Mangan ora mangan kumpul。」というものがあり、意訳すると「一緒にいられば食べても」といった意味で、コミュニティのまとまりを重要視するジャワ人気質を表す表現とされている。コミュニティの調和を重視することはジャワに来る前から知識として知っていたが、この日、身をもって経験した。



支援活動に昼夜はない。日が暮れてからも物資の配布は続く

CAREでは1日1000~1500世帯に物資を配布することを目標にしている。最終便の物資運搬トラックが村に到着した頃にはとっぷり日も暮れていた。配布活動にはCAREスタッフをはじめ、パートナーNGOのスタッフ、ボランティアなど多くの人々が関わっている。朝8時頃から夜8時、場合によっては9時10時まで働かなければならない重労働である。しかし、彼らはこのような支援活動に関わっていることを誇りに思いながら不平も言わず精一杯働く。支援を必要としている人々に迅速かつ確実に支援を届けるため。

スリランカ

プランテーション居住者の生活改善事業 (TEAプロジェクト) を終えて

ケア・スリランカ スワラエリア事務所駐在
プロジェクト・マネージャー 栗原 俊輔



出生証明書の発行巡回サービスの様子。多数の住民がこれまで所持していなかった出生証明書を手にした

2003年5月より3年間実施した「プランテーション居住者の生活改善事業 (TEAプロジェクト)」は、今年5月7日をもって終了した。気がつけば事業終了、と思うほどの速さで過ぎた事業期間であったが、振り返れば思い出すことに枚挙にいとまがないほど充実した3年間であったと思う。

事業背景にあるさまざまな要因

プランテーションとは単一作物農業のことを指し、スリランカではイギリス植民地時代に導入された。このとき労働力とされたのが南インドのタミル人である。彼らはイギリス人によってスリランカ (当時のイギリス領セイロン) へ安価な労働力として連れてこられ、農園経営者にすべてを統括管理されて暮らしていた。イギリスからの独立後、イギリス人が占めていた経営側の役職は、主にスリランカの多数派であるシンハラ人の上流階級へと移ったが、農園に代々住み、農園内労働者として働くタミル系住民にとっては、支配層が変わっただけで、その労働・居住環境はプランテーションが導入された19世紀当時から何も変わっていない。

現在も彼らの子孫が労働者として同じプランテーション農園に住み続けている。生まれてくる子どもも中学を卒業すると同時に労働者として農園で働くという繰り返しが行われている。農園経営者の管理下にある生活という要因に地理的要因も加わり、農園内の生活は外部の地域社会から完全に隔離したものとなっている。農園内には、中学までの教育機関や診療所など生活に必要な施設は整っているものの、今日のスリランカ国内の水準と比べてかなり見劣りがし、改修もあまり行われていない。また、日々の生活も単純労働の繰り返しで、さしたる娯楽もない中、男女を問わず飲酒に走る傾向があり、せつかく得た収入もその費用に消える家庭も多い。アルコール中毒は、農園コミュニ

ティでは深刻な問題となっている。

前途多難な事業開始

以上のような背景のもと、この事業では、紅茶プランテーション農園に居住するタミル系住民の社会生活改善を目的として活動を行った。まず、インフォメーション・センターを各農園に設置して地方行政員と農園住民の定期的な接点を作り、住民の情報・社会サービスへのアクセスを可能にすること、さらに、農園経営者側をも巻き込み、円滑な公共サービスの提供および経営者自ら生活改善に取り組むことを目指して活動を開始した。しかし、「生活改善」と言葉で言うのは簡単であるが、その歴史的背景から、スリランカのプランテーション農園住民への事業実施は、開始当初から前途多難であった。

元来、農園経営者が農園内の職住を統括管理する制度に慣れきった社会であり、農園経営者側および農園住民の双方に対して事業への理解を求めることは想像以上に労力の要する作業であった。経営者側へは、プロジェクト・マネージャーをはじめ、チーム・リーダーなど総動員で対象となる3つのプランテーション会社本部まで足を運び、事業の必要性を根気よく説明した。最終的に、現地で活動を開始するための覚書を交わしたのが、事業開始からすでに半年近く経ってしまったプランテーション会社もあった。また、各農園ではフィールド・スタッフが各居住地をまわり、住民に対してこの事業の趣旨を説明し、活動を開始することを知らせていったが、そもそもこのような事業の必要性を感じない住民も少なからず見られ、行政サービスの重要性やアルコール中毒の深刻さを説いて、理解を求める必要があった。

事業進行とともに得られた住民からの理解、経営者側の協力

さまざまな紆余曲折を経て、最終的

には対象とする15のすべての農園にインフォメーション・センターが開設され、地方行政官が定期的にセンターを巡回し、情報・サービスを提供することが可能になった。またセンターでは、住民が、以前はほとんど得ることのできなかった政府・民間・NGOによるサービス情報についても知ることができるようになり、それらの活動を進めていく過程で、住民および農園経営者側からの理解と協力が少しずつ得られるようになった。また、出生証明書の発行巡回サービスや各農園でのミニ・プロジェクト実施の際には、住民の自主的な取り組みと経営者側からの金銭的および物資面でのサポートが得られ、無事に遂行することができた。

農園経営者およびプランテーション会社からの協力体制の変化には目を見張るものがあった。当初はこのような事業に対して懐疑的である、または、紅茶の収穫作業に及ぼす悪影響を心配する経営者やプランテーション会社も多かった。しかし、インフォメーション・センターなど「目に見える」成果が増えていくにつれて、この事業が農園コミュニティ全体に良い影響を与え、経営者側も住民の生活が改善されることで農園運営がスムーズになるなど、経営者側の利点も理解されてきた。

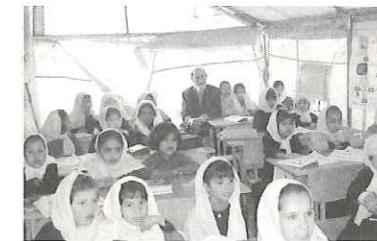
農園住民のさらなる生活改善、また、生活向上を目指して

これらの成果をもとに、第二期として2006年7月より新しい事業を開始した。新事業「紅茶農園内住民組織の運営能力向上プロジェクト」では、既存の農園内住民組織を巻き込み、住民および農園経営者側にCAREがこれまで行ってきた役割を少しずつ渡していき、CAREが去った後も自主的に継続できる体制作りを目指していく。

アフガニスタン

「コミュニティ運営による初等教育プロジェクト」2年度終了報告

プログラムコーディネーター 草川 町子



活動実績・成果

ケア・インターナショナル ジャパン (以下、CIJ) が実施してきた活動の内容は2つの要素に集約できます。一つは教材や文具の提供です。昨年度は生徒および教師に対して筆記用具を提供しましたが、今年度はカリキュラムの変更に伴い、新しい教科書と教材を対象地区の生徒に配布することができました。もう一つはコミュニティの学校を実際に管理・運営する地域の人々 (VECメンバー) や教師に対するサポートを行い、教育の機会と質の改善を側面から支える活動です。VECメンバーに対しては、男女平等や子どもと女性の権利といったアフガニスタンにおいては意識が低い問題についてワークショップを行い、その上で彼らの学校運営スキルの向上を目指しました。一方、教師に対しては、実地研修、再教育、学級運営などの研修ワークショップを行ってきました。これはタリバン時代に教職から離れていた人たちの復職と、現職教師のスキル向上を目的とするものです。これらの支援により、このような研修の機会を

アフガニスタンでは、1970年代後半から23年間にもわたって内戦が繰り返され、多くの死傷者、難民、避難民を生み出しました。2001年のタリバン政権崩壊と、新政府の樹立後、国の復興が進められていますが、長年の混乱によるつめあとは今なお深く、インフラ、社会システム双方の復興を阻んでいます。

教育は復興の要の一つですが、制度的な回復は不十分なままです。タリバン政権時代、女子は学校教育の機会を与えられませんでした。現在、学校の門戸は再び女子にも開かれ、就学を希望する児童数は急激に増えたにもかかわらず、遠隔農村地域では十分な数の公立学校が整備されていず、また教師不足も深刻です。

このような状況を改善するため、ケア・アフガニスタンは、1998年に「コミュニティ運営による初等教育プロジェクト (COPE)」を立ち上げました。この事業では、遠隔農村地域においてコミュニティにより運営される学校を設立し、管理・運営に当たる人々の能力強化と環境整備を行っています。また、事業全体を通して、女子が男子と同等の機会を与えられるよう配慮しています。

The Story of Rena ~ Renaの場合

アフガニスタンの伝統的習慣の中には、女子が教育を受け続ける際にさまざまな障壁が存在します。CAREスタッフとVEC (村教育委員会) メンバーの協力により、これらを克服したケースをご紹介します。

アフガニスタン東部Khost州にあるコミュニティによって運営されている学校に通うRenaは12歳の女の子。4歳で父を戦争で亡くした彼女は、今は母と二人の姉と共に住んでいます。4年生の彼女はとても優秀な生徒ですが、昨年、一時退学を余儀なくされる事件がありました。アフガニスタンでは、伝統的に叔父が姪の成長に責任を持ちます。Renaには3人の叔父がいますが、7カ月前、叔父の一人が、思春期に差しかかる女子が家の外に出て男子たちと就学するのは「一家の不名誉」であるとの理由でRenaを退学させたのです。CAREのスタッフは、学校によるモニタリングレポートでこの問題を知り、RenaのコミュニティのVECにこの話をもちかけました。VECメンバーは、村議会のメンバーとRenaの母親と話し合い、Renaに小学校教育を修了させるよう、叔父を説得しました。こうして彼女は、4年次を再度、履修するために学校に戻ることができました。最近のインタビューでRenaは、教育の重要性と将来の夢についてこう語っています。「教育を受けた女性は、家族を清潔で健康に保つことができます。私は大学に行って、将来は医者か教師になりたいと思います。」



得た教師の数は2年間で185人に上ります。研修内容の効果的な活用は、CAREの教員研修スタッフによるモニタリングによって確認されており、その教育の質の高さも、97%の女子、81%の男子が修了試験に合格していることが証明していると言えるでしょう。

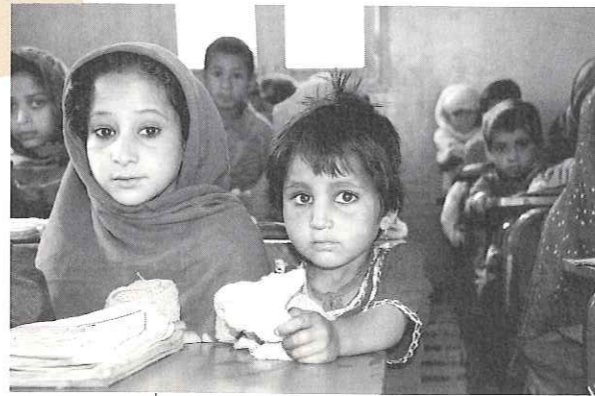
教育制度の復興に向けて

COPEの学校に通う子どもの数は年々増えており、今年度だけでもCIJの支援対象校で615人、事業全体では9078人の新入生を迎えましたが、COPE学校の生徒数を増やすことだけがこの事業の目的ではありません。各地域で政府の進めている公立学校運営システムの復旧に伴い、コミュニティの学校を公教育へ統合していくことを最終目標としています。既にこの1年だけでも、41校が教育省地方教育行政機関に委譲されました。さらに、CAREの役目は学校と生徒の委譲では終わりません。同時に政府教育機関の能力向上を支え、彼らが将来的に地方の教育に関する責任を負うことができるようサポートを続けていきます。今後、COPEプロジェクトは、ケア・アフガニスタンによって2010年まで続けられる予定であり、CIJも支援を継続する予定です。

※この事業は、2004年からこの活動を支えてきた山陽放送株式会社による「教え、戦場の子どもたち」キャンペーンでの募金によるご寄付を、ケア フレンズ 岡山を通していただいたことにより実現しました。この度、第2年度の活動終了にあたり、ご協力いただいた関係者の皆様に心からお礼申し上げます。

「パキスタン地震 緊急支援事業」 終了報告

プログラムコーディネーター 草川 町子



■基本情報
地震発生：2005年10月8日
被害状況：死者8万6千人。特に被害の大きかった北部の2州(北西辺境州、アザド・ジャム・カシミール州)では、地震発生直後、300万人の人々が生命の危機にさらされる状況にあった。
活動期間：2005年10月～2006年6月
寄付総額：898件/9,819,772円
(2006年3月31日募金受付終了)

ティを向上することができました。

復興に向けて

地震発生から一年。辺境地帯というアクセスの悪さ、土砂崩れの発生など今も多く困難がこの地域の復興を阻んでいますが、そのような状況でも人々は徐々に生活を立て直しています。恒久住宅の数はまだ全体から見ると10%程度に過ぎませんが、多くの人がテント生活から仮設住宅へと移りつつあります。地震直後に配布された家族用のテントはこのような仮設住宅の壁面補強に用途を変えながら、今も多くの人々に利用されています。このような状況の変化を受けて、ケア・パキスタンでは、緊急支援から復興支援へと活動の重点を移しており、インフラの整備だけでなく、地域の住民組織の機能の回復も支援しています。完全復興への道のりはまだまだ遠いと思われませんが、CAREは今後も、最も不利な立場に置かれている被災者に対する支援を続けていきます。地震発生直後からCIJを通してご支援いただいた皆様から心からお礼申し上げます。

世帯が優先的に支援を受けられるよう、各村において厳格な世帯調査を行った上でテントの支給を実施、特に男性世帯主を失った家庭など、経済的に困難な状況に置かれている家庭が優先されました。

学校用テントの支給

ケア・パキスタンでは、地震で崩壊した学校の再開に向けての活動も実施しました。アライ渓谷の全24校に対して、校舎の再建や教育機材の提供、校庭や衛生設備の整備を行いました。CIJからの支援もこの一部に活用され、パティエラ高校をはじめとする地域の10校の女子中等学校へ、仮設教室用のテントを支給しました。地理的にも首都から遠く離れたアライ渓谷はパキスタンの中でも保守的な地域で、文化的・伝統的に男子に対する教育が常に優先され、10歳以上の女子が学校に通うことに理解のない保護者が多いのが現状です。そのような状況下で、女子校にも男子校と同じようにテントを配布できたのは、地震のために女子教育が遅れを取ることはないよう、CAREのスタッフが地域の人々を説得したことによるものです。

現地活動用車両の提供

スタッフ用の車両は、当初はレンタルで賅ってききましたが、専用車を購入することで、より効率的に活動できるようになりました。道路の整備されていない辺境地域において、四輪駆動車は重要な足となります。地すべりなどの二次災害が発生した時に速やかな対応ができるようになるなど、活動のキャンパス

ケア・インターナショナル ジャパン(以下、CIJ)は、地震発生当日から情報収集活動およびケア・パキスタンとの連絡・協力を始め、2005年10月11日より緊急募金協力を呼びかけてきました。ケア・パキスタンは地震発生直後に被害の特に大きかった地域に拠点を開設し、援助物資(避難用シェルター、ビニールシート、毛布など)の支給、病院からあふれた人々の救援活動など、多岐にわたる緊急支援活動を開始しました。CIJに寄せられたご寄付はこの活動の一環として、被災地の中でも最も辺境地帯である北西辺境州バタグラム地区・アライ渓谷における活動に充てられました。この支援により行われた活動は以下の通りです。

- ①アライ渓谷の村落でのテントの支給(235世帯分・約1645人分)
- ②アライ渓谷の学校に対するテントの支給(10校に32張・868人が使用)
- ③現地活動用の車両の提供(四輪駆動車・1台)

被災者へのテントの支給

アライ渓谷は標高1300mを超える高地にあり、冬には夜間気温が氷点下に達します。しかも、険しい山岳地であることから緊急支援活動は困難を極めました。CAREでは最も被害が大きかった



パティエラにて学校用テントを建てるCAREスタッフとコミュニティの人々



ニジェールの女性にAIDSの危険性について説くため、またHIV/AIDSにつきまとうイメージを減らすため、CAREと共に活動するDjama

世界のCARE

ここでは、世界中のCAREの活動地から、ストーリーとともにCAREの活動の一端をご紹介します。

CARE in Niger

ニジェールは、世界でもとても貧しい国の1つで、国民の60%以上の人々が1日2ドル以下で生活しています。平均寿命はわずか46歳、妊産婦および乳幼児死亡率はアフリカ内でも高く、安全な水へのアクセスが確保できているのは国民の半分以上、読み書きができるのは約15%の人々のみです。

CAREは、ニジェールで活動する最大の国際協力NGOです。昨年は、ニジェールにおける食糧供給の3分の1がCAREによってなされました。CAREは、ニジェールにおいて30年にわたり、慢性的貧困を解決するための長期的視野に立った活動を行っています。現在、HIV/AIDS、保健、ジェンダー平等および女性の自立、収入向上、農村開発、市民社会との連携強化など、さまざまな分野においてプロジェクトを展開しています。これらのプロジェクトは、ニジェールの5つの地域にて、約85万人の人々が健康で安定した生活を得られるよう支援することを目的としています。

Mata Masu Dubara (MMD)は、西アフリカ言語で「動き出す女性たち」を意味します。これは、定期的に一定金額を貯蓄する女性から構成される、コミュニティに根ざした貯蓄と融資を行うためのグループで、CAREがニジェール全土においてその組織化を支援しました。このグループの女性たちは、お互いに蓄えられた食糧を分け合い、平時からの貯蓄に頼ることもできるので、食糧危機に対応することができます。現在、ニジェールの約172,000人の女性たちがMMDのメンバーです。また、MMDメンバーは、CAREが食糧の配布を行うにあたり、地域で最も支援を必要としている人々の情報を提供するなど、MMDメンバー以外の人々を助ける活動においても中心的な役割を担っています。

～ニジェールからのストーリー

輝かしい事例：ニジェールでHIVと共に生きる

Djama Amadouは、力強く明るく精神と、誰とでもすぐに打ち解けあえる優しい笑顔を持った女性です。「私の使命は、ニジェール全土の女性に、HIV/AIDSに冒される可能性があることを知らせることです」。

6年前、Djamaの夫は隣国のコートジボワールでより高収入の職を探すために、ニジェールを立ちました。慢性的貧困や経済の縮小、再発する食糧危機のため、国内労働者の多くが海外で一時的に働かなければなりません。Djamaの住むWandale村だけで成人男性人口の約90%が村を離れ、ナイジェリアやコートジボワールで出稼ぎ労働を探しています。

「夫は、やせ細って、戻ってきました。彼は医者診断を拒みました。夫は約3年、家を離れ、帰郷して半年以内に死にました。なんて悲しかったでしょう！夫の死後、書類を調べているうち、診療所が出した診断結果を見つけました。夫はAIDSを発症しており、彼はそのことをずっと前から知っていたのです」。そして、彼女自身も以前から体調が悪く感じっていました。「夫が私に病気を移したかもしれないということには思いも及びませんでした。その後、体の痛みが増し、擦り傷も

増えました。しばらくすると、自分の子どもを抱く力が失いました」。

Djamaは、自分も感染しているかもしれないという事実に向き合うことができませんでした。動く気力もないまま2週間以上をベッドで過ごした彼女は、ついに地域の診療所を訪ねました。「結果は陽性。すぐに死ぬのだと思いました。私は子どものことを考えると怖くなります。私も親戚も貧しく、誰も3人の子どもたちを食べさせる余裕がありません。あるとき、移動式診療所が抗レトロウイルス薬を提供していることを知りました。私にとっては非常に高額でしたが、仕事を増やし、子どもたちの食べる量を変えずに自分の分を減らすことで薬を購入することができました」。

しばらくして、彼女は回復しました。「私は今後もHIV/AIDSと共に生きていこう。しかし、治療を受ければ、健康を保つことができる。もし私を道端で見かけたら、私がHIV保持者であることに誰も気づかないでしょう」。彼女の回復に触発された診療所のスタッフらは、彼女にビデオ出演を依頼しました。そのビデオは、HIVを保持していても、きちんと治療を受ければ、普通の健康な生活

を送ることができることを他の女性に知ってもらうためのものです。彼女はビデオ出演を引き受けました。

その頃、彼女は再婚の準備を進めていました。「私がHIV保持者であることを彼に告げると、彼はそれでも結婚したいと言ってくれました。しかし彼は、彼の家族には私の病気のことを隠したりしました。ある日、私が出演したビデオがテレビで放映されるのを彼の姉妹が見たことで噂が広がり、彼の家族全員が、夫と私、私たちの子どもと縁を切りました。夫はこれに耐えることができず、私たちは離婚しました。夫は私と子どもを見捨てました。その時、私はすべてを失ったのです」。

Djamaはその後、CAREと地元のパートナー団体がHIV/AIDSに対する取り組みを行っていることを知りました。現在、DjamaはCAREの実施するMMDプロジェクトで活動しています。毎月、彼女と3人のHIV陽性のニジェール人女性がニジェール全土の女性グループを訪問し、自分たちの体験談を伝えることで、HIV/AIDSにつきまとうイメージをなくすための活動を行っています。「村のある住民が困難に陥っていると、その近隣住民が助けようとするが、HIV保持者となると事態は異なります。もし体調が悪くなると、皆が避けるようになります。この問題を解決する唯一の方法が教育です。病気について正しく理解し、病気を家族や近隣住民を安全に助け、サポートすることができることを知れば、皆、正しいことを行い始めるでしょう」とDjamaは言います。「私たちが活動するMMDグループは、HIV/AIDSに感染した村の住民だけを対象とする特別な穀物銀行を作りました。Wandale村のMMDメンバーであり、コミュニティボランティアのIze Abdou氏は言います。「体調が悪く畑作業ができないとき、銀行は食糧を提供します。また、売り上げ利益は治療費に充てられます」。

Djamaは、HIV/AIDSについて教育していることを誇りに思っています。「HIVのために多くのことを失いました。しかし、それ以上のものを得ました。私たちは、病気につきまとうイメージや無知と闘うため、共に活動しなければなりません。しかし、もっと重要なことは、互いに助け合おうとし、助けや支援を必要とする自分以外の女性や母親に背を向けられないことです」。

私スタイルのCAREライフ

メルマガ・ボランティアを続けながら

メルマガ作成ボランティア 津田 幸子

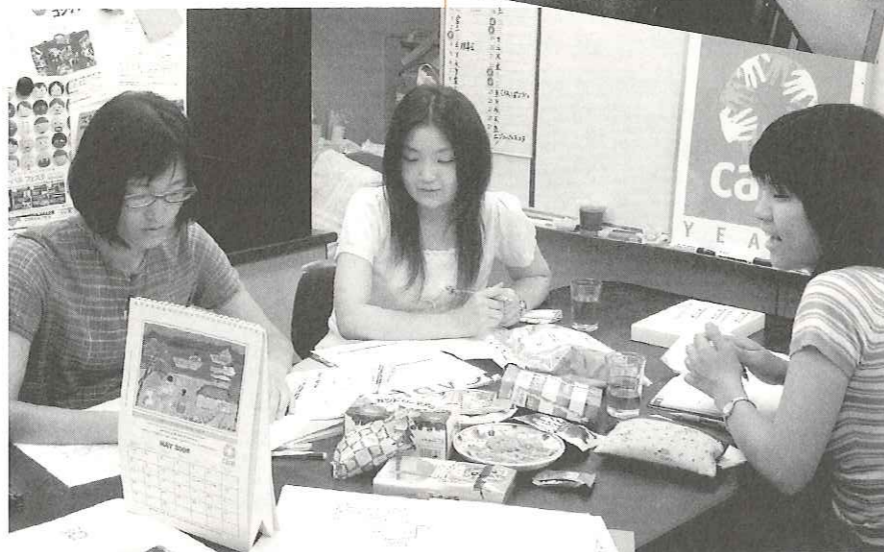


原稿を執筆するときは、校正会議の前に送る最初の原稿を書くまでがいちばん大変です。原稿を書くのは主に土日、平日はテーマに関係する資料を探したり、参考にする本に目を通したり、情報収集にあてています。時には、なかなか資料が見つからなくて、締切りに間に合わせようと完成度の低い原稿を送ってしまうこともあります。そんな原稿を送ったときの校正会議では、皆にびびり指摘されて、何度も書き直すこともあります。

私が国際協力に関心を持ったのは、中学生の頃に途上国の小さな子どもをTVで見ながらです。お腹がぼこり出て手足がガリガリの子どもたちの生々しい映像をみたときはとてもショックでした。まだ国際協力という言葉も知りませんでしたが、自分とあまりに境遇が違う子どもたちを思って泣いたのを覚えています。ただ、今の私は、その日と同じ映像を見たとしてももう泣くことはできないと思うのです。でも冷たい大人になってしまったわけではなく、「かわいそう」でただ泣いた頃とは違って、「受け入れる」ことができるようになったのかな、と思います。受け入れるなんてかっこつけた言い方ですが、右から左の情報ではなく、自分の頭と心の中に入れてこれからはずっと忘れてないで関心を持ち続けよう決めました。

国際協力関連の情報にアンテナをはりめぐらせて、自分にもできることをいつか行動に移したいと考えていました。社会人になって1年近く経った頃、ある雑誌を購入して目に留まったのがCAREでのボランティアでした。最初はCAREには同年代の社会人のボランティアはいませんが、スタッフの方や学生さんのボランティア仲間と色々話し合うのが楽しくて、CAREのメルマガチームが大好きになりました。しばらくすると、同年代の社会人の方も次々とメルマガに参加してくれるようになりました。

私がメルマガチームに参加して3年半が過ぎ、執筆させていただいた回数も30回を超えました。最初はボランティアこそ自分にぴったりの国際協力だと思っていたのですが、今では私にできる国際協力の最初の一歩なのかなと思っています。CAREでのメルマガ執筆を通して貧困や格差について自分なりに考えたり、スタッフの方や仲間と話し合っていくうちに、そう思えるようになりました。まだまだ何年も先になりそうですが、ボランティアの次には何ができるのか、少しずつ意識してゆきたいです。私はボランティアしてみたいと思ってから実際に始めるまでに長い時間がかかってしまいましたが、その分、自分のペースでじっくり続けたいと思っています。これからも、皆と一緒に「読むだけで国際協力」となるメルマガを発信してゆきます！



ただいまメルマガ会議中。お菓子を食べながらリラックスした雰囲気の中、雑談の中からよいテーマがひらめくこともしばしば。

CAREメールマガジン「読むだけで国際協力」制作工程

- ①月初めに企画会議（メルマガのテーマ・内容と原稿担当者を決定）
→約2週間後に原稿締切り
- ②校正会議（メンバー間で原稿内容を検討）
→原稿担当者は指摘された点を修正
- ③月末に最終編集
- ④翌月の1日に配信
上記2回の会議以外はメーリングリストでのやりとり。CAREのメルマガの特徴は、創刊号から現在まで、スタッフではなく、ボランティアが原稿執筆していること。メルマガチームは社会人が多いこともあり、会議開始は19時以降。メルマガとは直接関係のない国際協力の話や雑談で盛り上がり、終わるのが22時を過ぎてしまうことも。

※メールマガジン「読むだけで国際協力」の購読申込みはホームページから。

Our Supporters

～CAREサポーターからの声

ここでは、CARE World Vol. 2 とVol. 3の送付時に同封したアンケートにお寄せいただいた皆様からのご意見、ご感想を紹介いたします。また今後は、アンケートのみでなく、お手紙やメールにていただいたコメントなどについても、掲載についてご承認いただいた場合には随時、紹介させていただきます。同じCAREという団体を支援いただく皆様それぞれの思いを掲載させていただくことで、ニュースレター『CARE World』を通して皆が繋がっていかれたら、と思います。

パレスチナ、イラク、アフガニスタンなどの現状（ほんとうの姿）が知りたい。南米、アフリカなどもとどきどきは載せていただければ幸いです。新聞・ラジオ・テレビなどであまり報道されないような裏記事も載せていただければなおさらのこと。

（私スタイルのCAREライフについて）ボランティアで関わっている方の想いが伝わるものはとてもいいですね。ぜひ継続してください。

出版物の内容が充実してきたことは、その活動を広く知ってもらおうと大変よいことだと思います。出版コスト、編集労力がかさみますが、頑張ってください。

*「今後、掲載してほしい記事」としては、以下のようなものがありました。

- ・子どもたちの状況、生活など。
- ・60年前にCAREパッケージを受け取った方による記事
- ・支援先の生活の現状の具体的な報告（統計・写真などが入ったもの）
- ・ケア・インターナショナル ジャパン以外のメンバー国の活動状況（例えば、ケアUSAやケア・フランスなど）

ケア・インターナショナル ジャパンが広く世界で貴重な活動を続けていること、そして、その価値を学ぶことができ、改めて私たちの地道な活動の重要性、必要性を再認識することができました。

ニュースには流れないような地域の抱える問題、状況をまず知ることが大切で、このニュースレターで少しずつ理解していくことができました。今後もっとそのような記事があるとうれしいです。

世界の困っている人たちに少しでもお役に立てば、と孫におこづかいを渡すつもりでほんのわずかですが、協力させていただいています。

昨日、受け取り、読ませていただきました。今まではCAREさんの活動についてほとんど何も知らなかったのですが、今回、募金の使い道など丁寧に伝えてくださって細やかなケアに思わず読みながら涙がでてきました。ありがとうございます。これからもひとりでも多くの方たちに伝えるように私も微力ながらお手伝いさせていただきます。

アンケートにご協力いただきました皆様、ありがとうございました。皆様からのご意見について一つずつ検討し、今後の企画に反映させていただきたく思います。

CARE World

ケア・インターナショナル ジャパン
ニュースレター
CARE World Vol.4
2006年10月31日発行 (季刊)
編集責任者：野口 千歳
編集：菅沼 みゆき

財団法人
ケア・インターナショナル ジャパン
〒171-0032
東京都豊島区雑司ヶ谷2-3-2
Tel: 03-5950-1335
Fax: 03-5950-1375
E-mail: info@careintjp.org
www.careintjp.org



CARE Notice Board

CARE設立60周年記念ディナー 11月18日(土) 18:30~

今年、CAREは、設立60周年を迎えます。

世界における貧困や社会的不公正と闘うCAREの活動に対し、さまざまな形で協力をしてくださった皆様、11月18日のCARE設立60周年記念ディナーにぜひご参加ください。

帝国ホテルでのディナー、世界的に活躍中のソプラノ歌手中丸三千繪さんのオペラコンサート、そして素敵なギフトが当たるラッフル。60周年のテーマは「女性のチカラ」です。安倍洋子氏、加藤睦子氏、横田笑氏の長年のCAREへのご貢献を称えた表彰式も行われます。

皆様お誘いあわせの上、ぜひご来場ください。

*このチャリティー・ディナーの収益は、途上国の人々の自立を支援するCAREの活動に役立てられます。

記

- 日時：2006年11月18日(土) 18:30~21:00 (会場18:00)
- 場所：帝国ホテル3階 富士の間
- 後援：フランス大使館、スリランカ大使館、アメリカ大使館(申請中)
- 特別協賛：株式会社VSN
- 協賛：セイコーインスツル株式会社
ティファニー・アンド・カンパニー・ジャパン・インク
- 協力：スターバックス コーヒー ジャパン 株式会社

ご連絡先

(財)ケア・インターナショナル ジャパン
常務理事・事務局長 野口千歳
Tel:03-5950-1335
Fax:03-5950-1375

●中丸三千繪氏プロフィール

桐朋学園大学声科卒業、同大学研究科終了。
在学中よりニューヨーク、ザルツブルグに留学。
1986年小澤征爾指揮の新日本フィルのR.シュトラウス「エレクトラ」のタイトルロールで日本デビュー。1990年の第4回「マリア・カラス国際声楽コンクール」(RAIイタリア国営放送主催)の優勝を機に、一躍、欧米各国から出演依頼が殺到。ミラノ・スカラ座をはじめとする各地の名門歌劇場で主役をつとめる。1998年からは日本各地で小児がんの子どもを支援するチャリティコンサートも行っている。

*皆様のご意見をお寄せください。

CARE Worldでは、皆様からのご意見、ご感想、ご要望を募集します。ご意見、ご感想などは、CARE World 誌面上にてご紹介させていただきます。また、「CAREの活動のこの点が知りたい」「今後のCARE Worldでこういったことを取り上げてほしい」などのご要望については、次号以降の企画に順次、盛り込んでいきます。皆様と一緒に「CARE World」を広げていきたいと思っております。

ご意見、ご感想、ご要望は、当財団事務局まで郵送、ファクス、メールのいずれかの方法でお送りください。お待ちしております！